



## 2. 茅葺き民家の分布状況

町内で228軒の茅葺き民家を確認することができた(図2)。屋根が茅葺きのままのものは1軒もなく、茅葺きの上にトタンをかぶせたものが圧倒的に多く221軒あった。他にはトタンの上にスレート瓦を葺いているものが7軒あったが、これはごく最近、改修されたものである。

地区別では、太刀野山地区が134軒と最も多く全体の6割近くを占め、ついで清水地区26軒、太刀野地区21軒、加茂野宮地区18軒、芝生地区15軒、勢力地区14軒となっている(図3)。

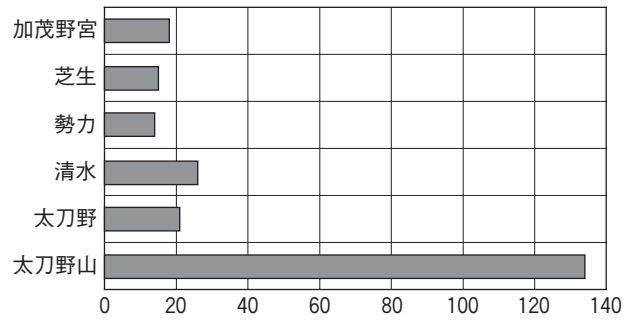


図3 地区別茅葺き民家の戸数

尚、詳細調査を実施したのは表1に示す9軒である。文献調査、聞き取り及び現地踏査により選定した。

表1 詳細調査実施民家

	名称	所在地	建設時期	主屋の間取
1	田村サ、エ家	加茂野宮	1870年以前	右勝手四間取
2	竹重 成重家	加茂野宮	1850年頃	左勝手四間取
3	久保 義雄家	清水	江戸末期	右勝手六間取
4	久保 貞夫家	清水	天保3年	左勝手八間取
5	大北 清家	太刀野山	1800年頃	左勝手四間取
6	宮本 高明家	太刀野	不明	右勝手四間取
7	林 ヨシエ家	太刀野山	明治23年	右勝手六間取
8	窪田 清家	太刀野山	明治初期	左勝手六間取
9	新名 澄子家	加茂野宮	安政4年	左勝手変形五間取

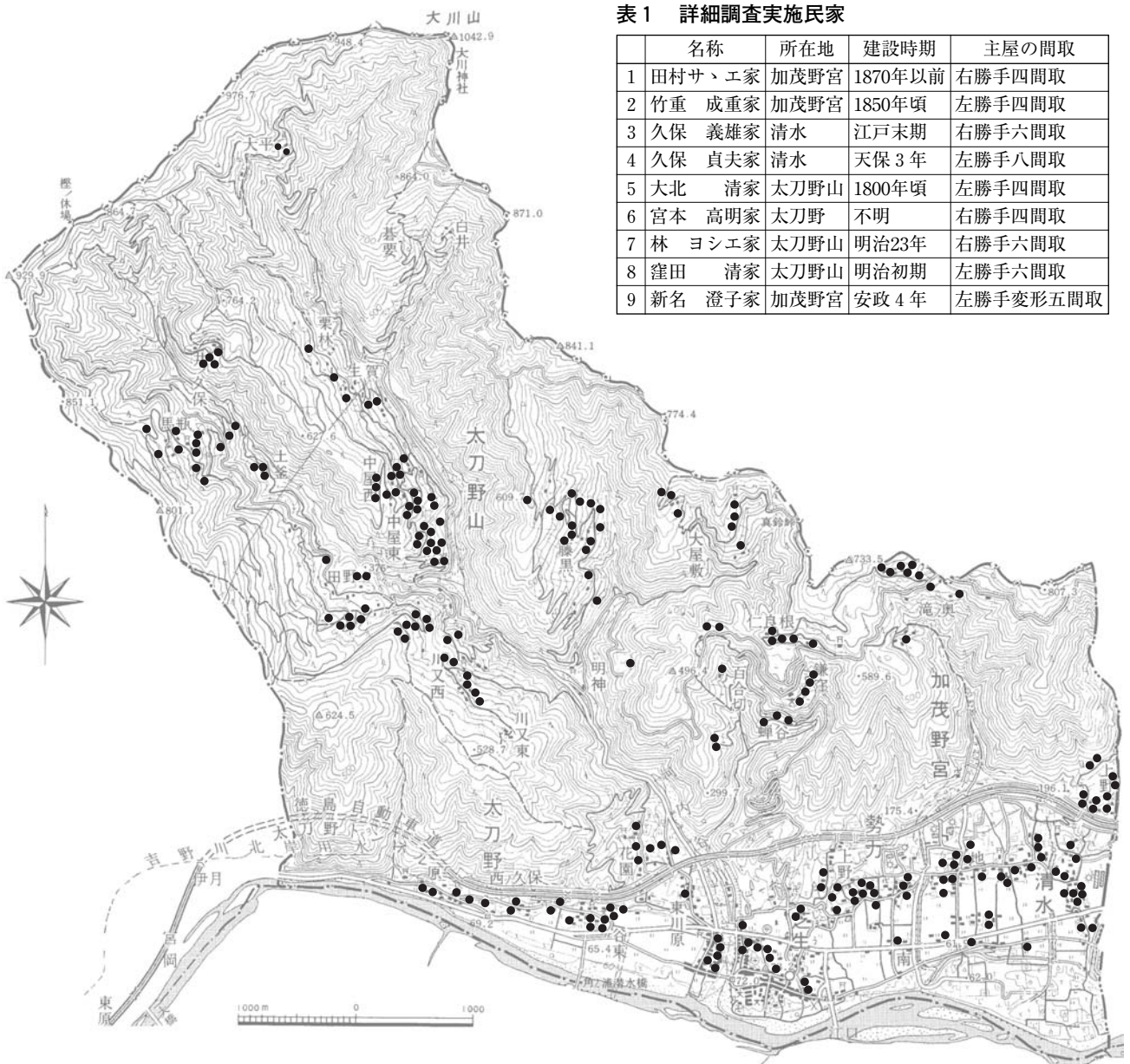


図2 茅葺き民家の分布状況

### 3. 茅葺き民家全体の傾向

#### 1) 利用状況

利用形態を見ると、7割強の163軒は住居として利用されている。また、約1/4の52軒は空き家になっている。納屋などに用途変更されているものは10軒と少ない。尚、住居として利用されているのは殆どが農家であるが、芝生地区の町中では非農家の専用住宅として利用されているものもあった(図4)。

#### 2) 建設時期

建設時期を確認できたのは、87軒と全体の4割弱であるが、その内訳は江戸後期16軒、明治初期2軒、明治中期36軒、明治後期3軒、大正期10軒、昭和(戦前)9軒、戦後が11軒である。このうち正確な年代が確認できて最も古いのが安政5年、最も新しいものが昭和40年である(図5)。

#### 3) 主屋の方位と敷地

主屋の方位は南向きが最も多く、全体の63%を占めている。ついで東向きが33%で、北向きや西向きはほとんどない(図6)。

敷地の立地を見ると、平坦地に位置しているものは全体の27%と少なく、殆どが傾斜地に位置している。傾斜方向は南斜面か東斜面で、西斜面は1軒のみ、北斜面は1軒もない。傾斜地に建つ民家の方位を見ると、南斜面では西向きの1軒をのぞき全て南向き、東斜面では9割が東向きになっており、敷地の傾斜方向と主屋の方位はほぼ一致しているといえる。尚、東斜面の場合でも、敷地に余裕があるなどの理由で主屋を南向きに設けている例が7軒ほどある。また、平坦地では殆どが南向きに主屋を構えており、地形による制約を受けない敷地の場合、主屋は南面して設けられる傾向にあることが分かる(図7)。

#### 4) 間口の寸法

主屋の間口は6.5~7間が最も多く、ついで5.5~6間であり、両者で全体の約7割を占める。5間以下の小規模なものや7.5間以上の大規模なものは少ない(図8)。

#### 5) 間取り

間取りが確認できたのは127軒、殆どが土間と田の字型平面の座敷を有する四間取で111軒、間取りが明らかなものの9割以上を占めている。他は六間

取が5軒、変形五間取が2軒、三間取が2軒と二間取が7軒である(図9)。

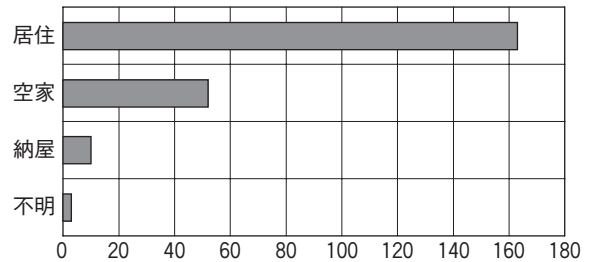


図4 利用形態

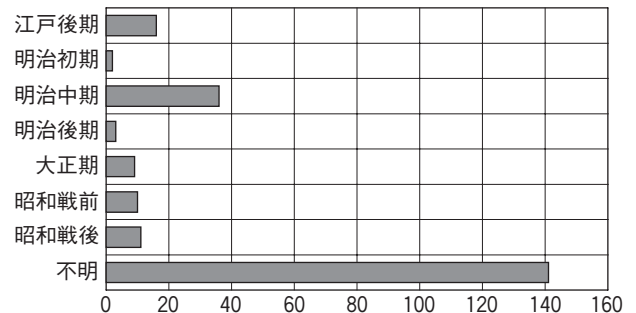


図5 建設時期

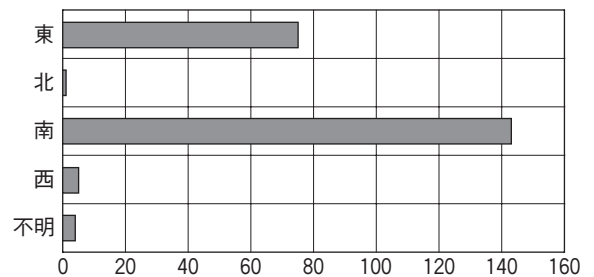


図6 主家の方位

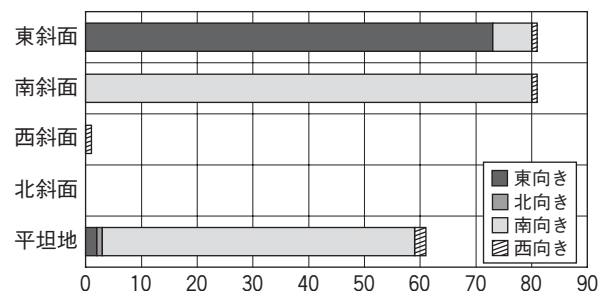


図7 敷地の立地と主屋の方位

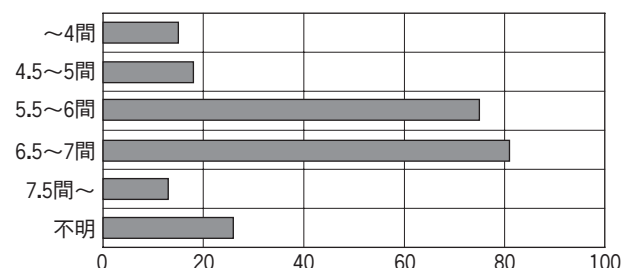


図8 主屋の間口



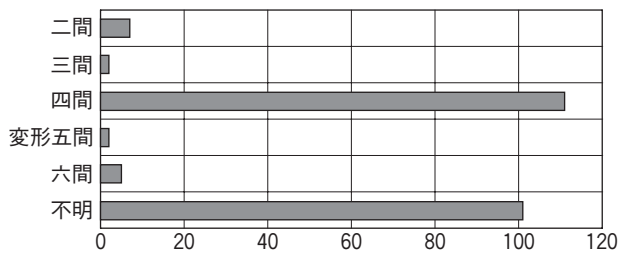


図9 主屋の間取り

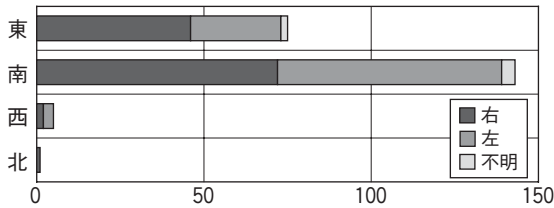


図10 主屋の方位と勝手の向き

勝手の位置については、右勝手が122軒、左勝手が97軒と、右勝手の方がやや多い。主屋の方位と勝手の関係を見ると、南向きの場合、右勝手が72軒、左勝手が67軒とほぼ同数であるが、東向きの場合、各々46軒と27軒となり、右勝手が圧倒的に多くなる。これは、東向きの場合、左勝手にすると、土間部分が南向きとなることを避けた結果と考えることができそうである(図10)。

玄関を有する民家は3軒のみで、その勝手の位置は右勝手が2軒、左勝手が1軒となっている。

### 6) 建設時期別の傾向

建設時期が不明な民家が多いため、断定的なことを述べることはできないが、建設時期により一定の傾向が見られるのは、間口の寸法と間取りである。間取りは、いずれの時期も四間取が最も多いが、江戸後期から明治初期に建設されたものは、間取りが不明なものをのぞき、全て四間取である。変形五間取や六間取が見られるのは、明治中期だけである。一方、三間取は大正期と戦後のみに、二間取は戦後のみに見られる(図11)。

間口寸法は、明治後期までは6間以上のものが殆どであるのに対し、大正以降は5.5間～6間が最も多くなり、それ以下のものも目立つようになっている(図12)。

以上のことから、明治初期までは間口が6間以上の四間取平面の民家が一般的であったのに対し、明治中期になるとより規模の大きい変形5間取や6間取平面の民家が現れ、それ以降は逆に間口が狭まり、平面形も2間取や3間取といった民家が現れるよう

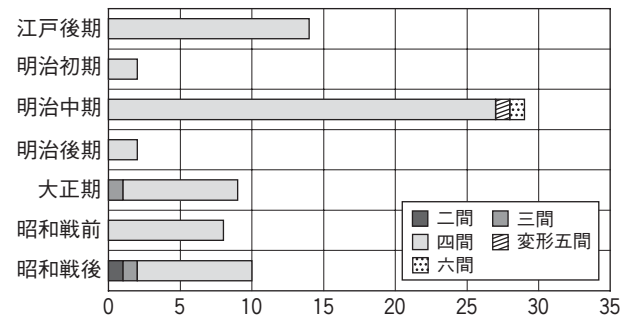


図11 建設時期と間取り

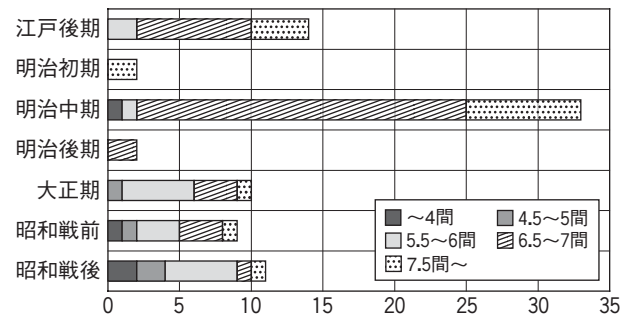


図12 建設時期と主屋の間口

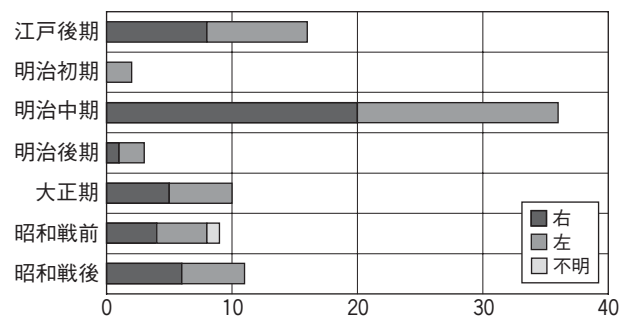


図13 建設時期と勝手の向き

になったといえる。勝手の位置に関しては、建設時期との相関性は低く、サンプル数の少ない明治後期をのぞき、いずれの時代も右勝手、左勝手がほぼ同数となっている(図13)。

### 7) 地区別の傾向

地区別の特徴が最も顕著なのは、敷地の立地である(図14)。吉野川沿いの平野部に位置する加茂野宮、芝生、勢力地区では平坦地に位置する敷地が多い。また、山裾にある清水、太刀野地区では南斜面が多い。一方、山間部となる太刀野山地区では平坦地はほとんどなく、大部分が南斜面か東斜面になっている。こうした敷地の立地条件を反映して、主屋の向きは、加茂野宮、芝生、勢力、清水地区では全て南向き、太刀野、太刀野山地区では南向きか東向きが殆どとなっている(図15)。

主屋の間口では、加茂野宮、芝生地区で5間以下

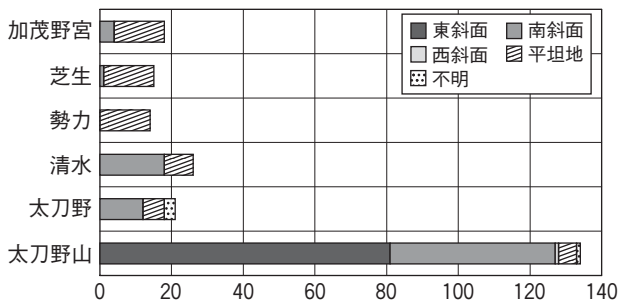


図14 地区別敷地状況

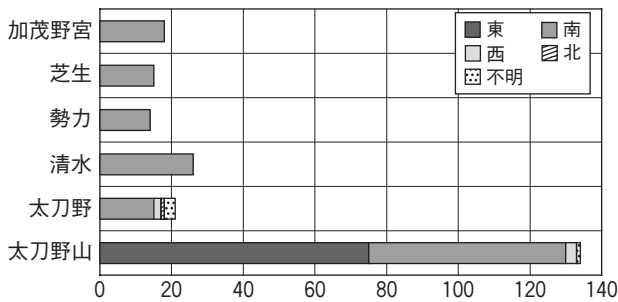


図15 地区別主屋の方位

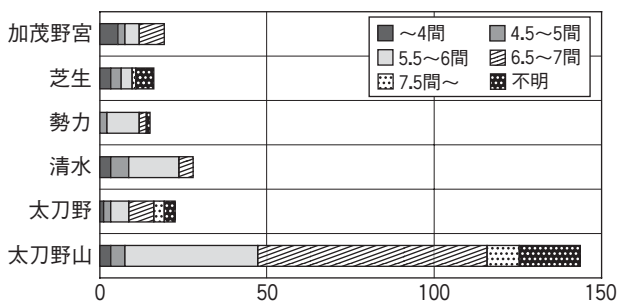


図16 地区別主屋の間口

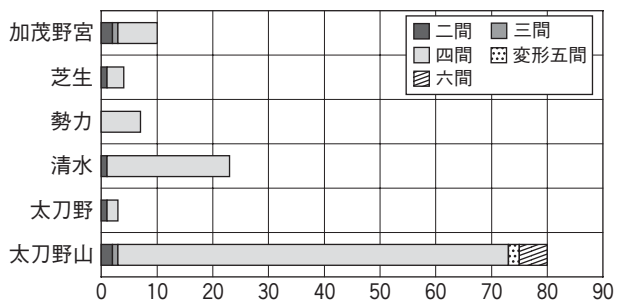


図17 地区別主屋の間取

の規模の小さい民家の占める割合がともに4割前後と比較的高い。勢力、清水地区では5.5~6間と中規模のものが多く、太刀野、太刀野山地区では6.5間以上の規模の大きいものの比率が高い(図16)。

間取にも似たような傾向が見られる。どの地区も4間取が圧倒的に多いが、変形5間取や6間取が見られるのは太刀野山地区だけである。一方、加茂野宮や芝生地区では2間取、3間取の占める割合が他

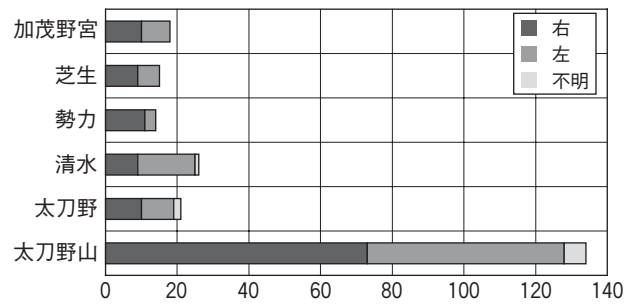


図18 地区別勝手向き

の地区よりも高くなっている(図17)。勝手向きについては、勢力地区で右勝手が比較的多いほかは、際だった特徴は見られない(図18)。

#### 4. 詳細調査民家の概要

##### 1) 田村サ、エ家 加茂野宮

三野町東部の緩やかな南向きの丘陵部に位置する(図19)。かつて豆腐屋をしていたことがあり、屋号を「トウフヤ」という。当家は分家で、東側の田村ヨシアキ家が本家にあたる。初代は、半田町日浦出身の萬兵衛。

主屋は間口5間半、奥行3間。四間取りであるが、ザシキ以外の部屋は小さい(図20)。昭和40年94才で亡くなった祖父がこの主屋で生まれたといわれ、これより建設時期は130年以上前と推定される。当時、古い家屋3軒分の材料を転用して建設されたという。

下屋は四方にまわっておらず、正面と両脇の3方向のみである。当初、下屋のない葺き下げであったかどうかは不明だが、当主が嫁いで来た昭和15年の時点でオプタはあった。上屋はもと藁葺きで、昭和50年以降にトタンを巻いた。昭和35年頃まで麦をつくり、葺き替え材料を貯えて、近所の人や職人4・5人で毎年少しずつ葺き替えていた。大黒柱は檜で、



図19 田村サ、エ家外観

それ以外の柱は栗材が使用されている。

かつて土間であったニワには床が貼られているが、外壁の一部は土塗り壁のままであり、座敷には天井が張られておらず、梁やヤマト天井の下地竹が見えるなど、改造が少なく、建設当初の姿をよく残している。

かつて火事の時には、濡れた布を竹につけて棟にたてかけて火の粉を防いだという。

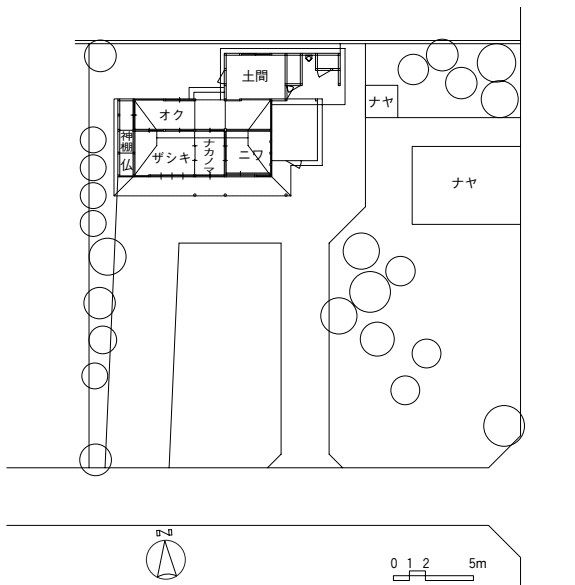


図20 田村サ、エ家配置図

## 2) 竹重成重家 加茂野宮

香川県境に近い滝ノ奥集落の最上部に位置する。屋敷は、南向き急斜面を切り開き造られており、等高線沿いに建物が直線的に並ぶ典型的な山村民家である。建物は、オモヤを中心として、西に乾燥室・ナヤ、東にハナレ（元は蔵であった）が横一列に配置されている（図21）。敷地南側には防風林として山椿が植えられているが、煙草栽培を行っていた時期には、天日干しのため椿を刈り込んでいた。屋号

は右上と書いて「コウベ、ヤマカ」、家紋は「サンガイビシ」、宗教は「モント」、屋敷神はイワガミさん（竹重家の神）を祀っている。

主屋は、1850年頃に建てられたそうだが、棟札は見つからなかった（図22）。間取りは、「オモテ」「ナカノマ」「オク」「チャノマ」の「四間取り」である。現在は、北側の増築、東側押入部やドマ部の改造など手が加えられている。柱材は全て「栗」が使用されており、大黒柱「210×210」、向かい大黒柱「170×170」も栗材で、向かい大黒柱が大黒柱の南側に位置しているのは珍しい。

屋根は小麦殻で葺かれており、1970年頃トタンで包んでいる。下屋部は、「割竹+わら+土」のヤマト天井であり、かつての木舞は雑木で作られていたそう。また、仕口の差し口に菜種油を差して組んだという興味深い言い伝えもある。



図22 竹重成重家外観

## 3) 久保義雄家 清水

清水地区西部、緩やかな南斜面に広がる西の西集落の中程に位置している。周囲に築地塀を巡らし、南側には長屋門を構える立派な屋敷構である。かつては屋敷内に藍の寝床などもあり、藍商としての屋

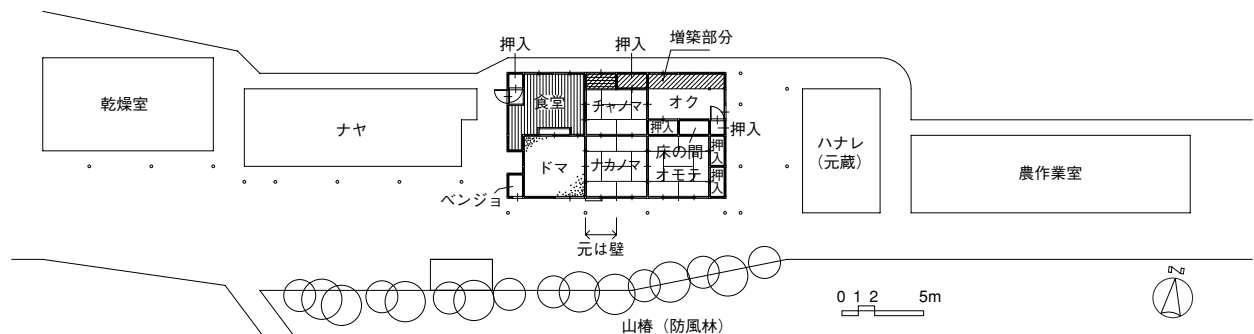


図21 竹重成重家配置図



敷構成がなされていたが、今では主屋と庭だけが当時の姿で残されている（図23）。

現当主は徳島市内に在住しており、今は住居としては利用されていないが、手入れは行き届いており、主屋の傷みは少ない。

通りを介して向かい合う久保貞夫家の本家にあたり、天保3年建築の久保貞夫家よりも古く、建築時の参考にされたといわれており、建築時期は天保3年以前と推定できる。

主屋は間口8間、奥行き5間の右勝手、六間取りである。正面の玄関とその右隣の座敷の広縁、東側の浴室や便所部分は後の増築によるものと思われる（図24）。しかし、本体部分の改築は少なく、天井を貼っていない土間部分では、小屋組、建具などに建

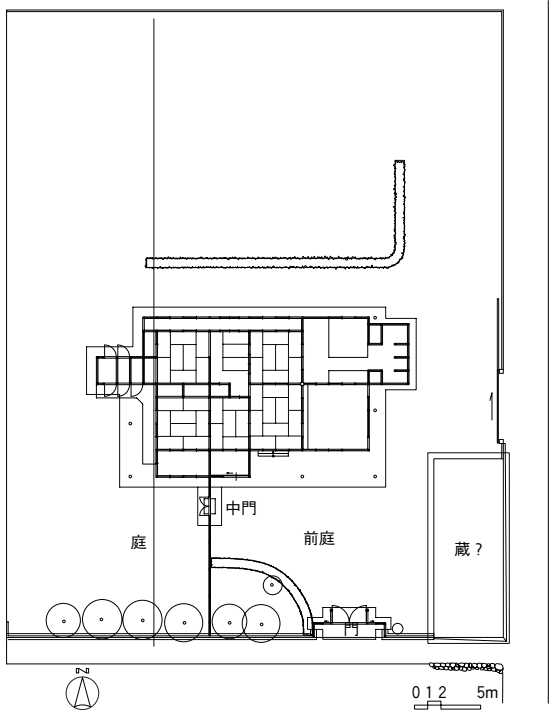


図23 久保義雄家配置図



図24 久保義雄家外観

築当初の様子を見ることができる。大黒柱は230mm×250mm、柱間寸法は2,000mmである。

屋根は当初より入母屋の瓦葺きで、四方に下屋を配している。外壁はささら子下見板張りに漆喰塗<sup>しっくい</sup>り、部分的にモルタル補修の跡が認められるが、内部同様、当初の雰囲気を残している。

#### 4) 久保貞夫家 清水

当家は、太刀野山の東南部、吉野川北側に開けた緩やかな斜面地にある清水西の西集落のほぼ中心に位置する大きな屋敷である（図25・26）。初代は百姓であったが、天保4年にはすでに主家と納屋が建っていたという。2代目の当主が、農業をしながら京都で呉服商を営み、財をなした。この代の時に蔵などを建てている。3～4代目は地主として栄え、大正期にはいち早く養蚕を起し、まわりの家が手伝いに来ていたという。以降、徐々に各戸でも養蚕を手掛けるようになったが、その取りまとめ役として、商家としての性格も有していた。現当主は5代目にあたる。屋号は「マルセンクボ」、家紋は「ゴサンノキリ」である。

現在の屋敷構えは、「オモヤ」を中心に東側に増築をした「ザシキ」、西側に「ナヤ」、南側の庭を挟んで正門がある。南東隅には「マエグラ」、「オモヤ」北側に「ウラクラ」、その西側に「インキョ」が配されている。家人によると、かつては屋敷の東側の畑部分に、使用人のための長屋や大きな作業倉が建ち並んでいたという。

主家は、左勝手の木造平家建て厨子造り、当初の4間取りに増築部分の「ザシキ」を加えると8間取りとなり、商家の機能を示す「ミセ」や「ゲンカンノマ」を持つ。「ゲンカンノマ」「ザシキ」や「オモ



図25 久保貞夫家外観

テノマ」などの接客用の座敷が広く、また「ダイドコ」の面積も大きく取られており、来客の多かったであろう最盛期の様子が偲ばれる。

棟札の確認はできなかったが、当主の話から、天保3年の建築であることが推測される。

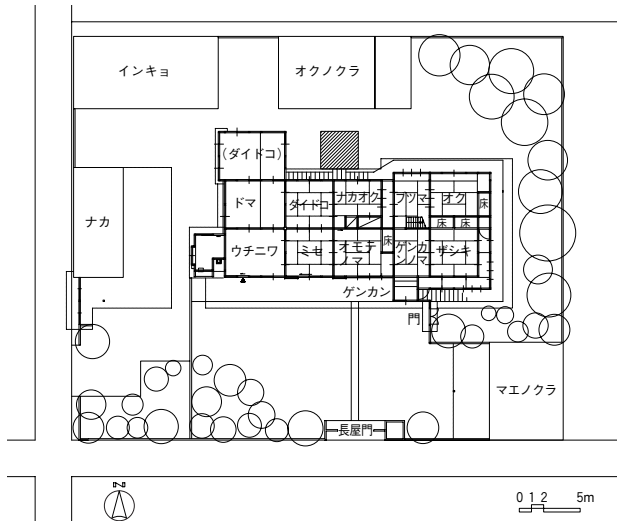


図26 久保貞夫家配置図

5) 大北 清家 太刀野山

大北家は太刀野山地区のほぼ中央部の東斜面に広がる中屋西集落の中程に位置し、南北にはしる町道に面している。

敷地は町道より一段高くなっており、今回調査対象とした建物は20年くらい前まで主屋として利用していたが、現在は物置となっている。町道とこの建物との間に、現在、居住している主屋が建っている(図27・28)。

以前はたばこを栽培する農家であったが、現当主は大工をしている。屋敷神は「オミネノカミサン」と呼び、家のすぐ下にある。

建築年代を棟札にて確認することができなかった



図27 大北家外観

が、家人からの聞き取りによると200年くらいになるという。東向きで左勝手、屋根は寄棟で周囲に下屋を設けない吹き下げ形式で、麦ワラの上にトタンを巻いている。小屋組は「さす組」、軒裏は表しになっている。外壁は土壁のまま、建具類も板戸・障子と建築当時のままである。

間取りは四間取りで、玄関を入れてすぐが「ニワ」、その奥は「カマヤ」で今なお「カマド」がある。「ニワ」から「ナカノマ」へあがり、北側に「トコ」がある「オモテ」、西側には「チャノマ」とその奥に「オクノマ」がある。

「チャノマ」には「イロリ」がある。天井は「スナコ」(竹)天井で、タバコを吊して乾燥させていた。大黒柱は「ニワ」と「ナカノマ」の間にあり6寸角で、その他の柱は4寸角である。

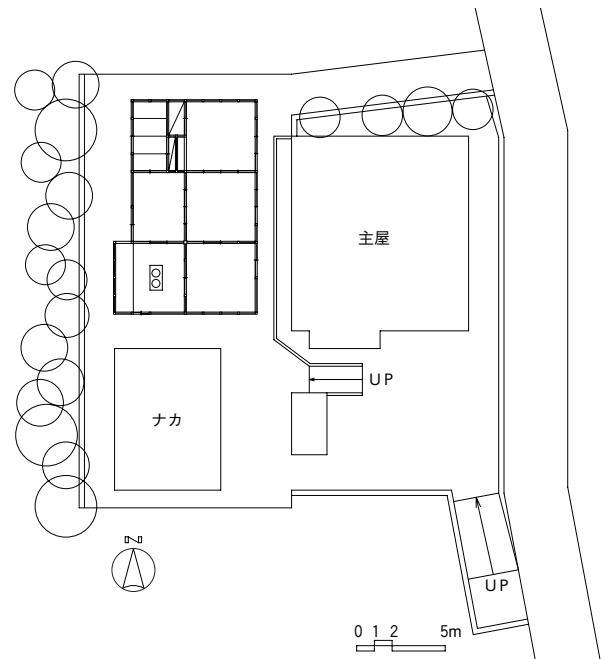


図28 大北家配置図

6) 宮本高明家 太刀野蟬谷

宮本家は三野町では少なくなった<sup>たばこ</sup>煙草農家である。調査に訪れたとき、主屋の前には竹製骨組みにシートを葺いた仮設上屋の下に煙草の葉が束になって吊され乾燥されていた。

敷地は山を背に南を向いて前面道路からスロープで少し上がったところにある。母屋を中心に西に土蔵、東にコンクリート造の浴室棟を挟んで納屋が横に並ぶ(図29)。

主屋は平瓦葺四方下の付いたトタン巻きの麦藁葺



寄棟屋根で（頂部は小さな入母屋風になっている）、平面形式は右勝手四間取りである（図30）。間口八間、奥行四間と間口が広いが、ニワの横にカラウスバがあるため、奥にあるカマヤ共々現在は床揚げされている。屋根は元来葺き下しであったが、昭和30年初め頃に大蓋を設けて麦藁屋根にトタンを巻いた。麦藁の耐久性は悪く、10年位で葺き替えしていたとのこと。棟の中央には煙出しのためなのかトタンで細工した小さなドーマー屋根風の飾り屋根が設えられている。



図29 宮本高明家外観

室内は天井が張られており棟札を確認できなかったため建築年代を特定できなかった。また、当主の二代前の方がこの家を買ひ、隣地から越してきたので建物の詳しい来歴は聞き及んでいないとのこと。

オモテには正面北側中央に一間幅の床の間が設けられ、左隣に半間幅の違棚があるが、その左の部屋の西側には落し掛けを付け框で床を揚げた床の間状の部分があり、仏壇が置かれている。

このような間取りはこれまでの調査で見られなかった珍しいものであるが、建築時からのものか改造されたものかは定かではない。オクとキタノマの北側半間分は増築されたものと思われる。オモテの南

と西には矩折りに、そしてオクの西側には外縁が巡らされ、両部屋の外縁が合わさるところに便所が設けられて、外縁を伝って行けるようになっている。大蓋柱は水に強いヒムロの木であるが、その性質上ほとんど曲がっているものをその形のまま使用し、基礎石も几帳面に形を合わせて作られている。

### 7) 林ヨシエ家 太刀野山

当家は河内谷川の西岸、緩やかな西斜面に位置する。家紋はマルニ、宗教は浄土真宗。

代々教員をしており、藩政時代は寺子屋、維新後は花園尋常小学校となる（主屋の東側の建家を使用）。主屋は明治23年の建築、玄関構えの右勝手6間取りである（図31・32）。「ゲンカン」からは賓客、「ミセノニワ」からは一般の人、裏の勝手口からは使用人が出入りしていたという。ミセノニワの腰壁には凝った意匠がされ、釘なども創建当時のものと思われる古いものが使われている。

主な柱材は梅（115×115）、大黒柱（260×260）は紫檀（といわれているそうだが不明）、向かい大黒柱（210×155）は欅である。オモテの床脇には書院があるが長押は無い。昔養蚕をしておりその後は煙草の栽培もしていたそうである。養蚕のためにゲ



図31 林ヨシエ家外観

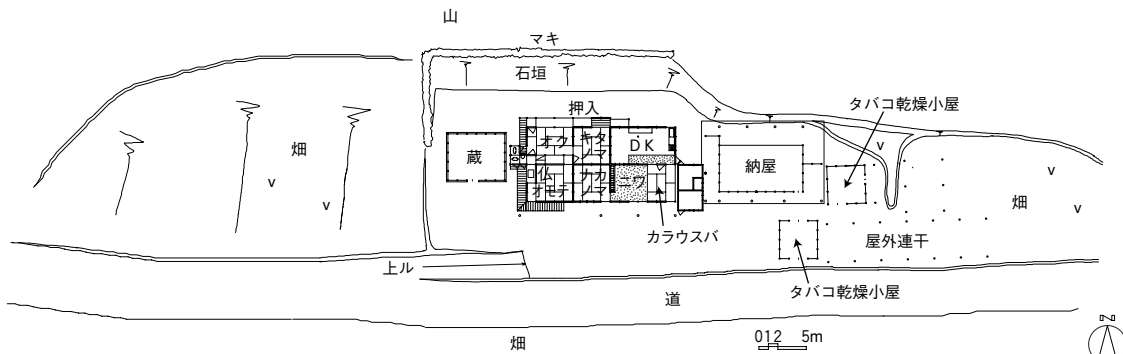


図30 宮本高明家配置図

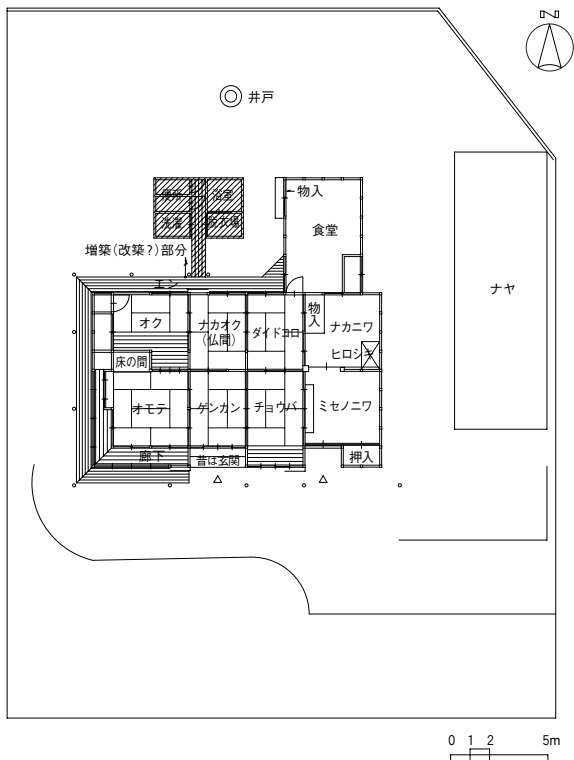


図32 林ヨシエ家配置図

ンカン、チョウバ、ダイドコロには畳一帖分程の大きなイロリがあったそうで、ゲンカンとチョウバの天井にはスライド式の気抜きも残っている。ナカニワの上部には釣り床（ヒロシキ）があり使用人などが寝起きしていたそうである。またダイドコロの下

には芋穴が残っている。

### 8) 窪田 清家 太刀野山東谷

傾斜地をひらき石積みをしてつくられた敷地に、蔵・母屋・納屋（牛舎附属）・蒸屋が並び建つ。

母屋・納屋・蔵ともに明治初期の建築といい、納屋は明治11年に近くのニガラベで焼いた瓦を葺いている。母屋の屋根替えは8～10年毎に懐を麦ワラで、サンカク（棟妻）とアマチ（軒端）をカヤで葺いていたが、昭和30～35年頃にトタン巻きとした。

母屋は中二階建、左勝手。表下手より「ウチニワ」「アガリハナ」「ナカノマ」「オモテ」、裏下手より「ダイドコロ」「シタノダン」「ウエノダン」「オクノマ」と呼ばれる間取りから成る。柱は杉や松の四寸材で、樫の大黒（190mm×220mm）と相対して「ムコ



図33 窪田 清家外観

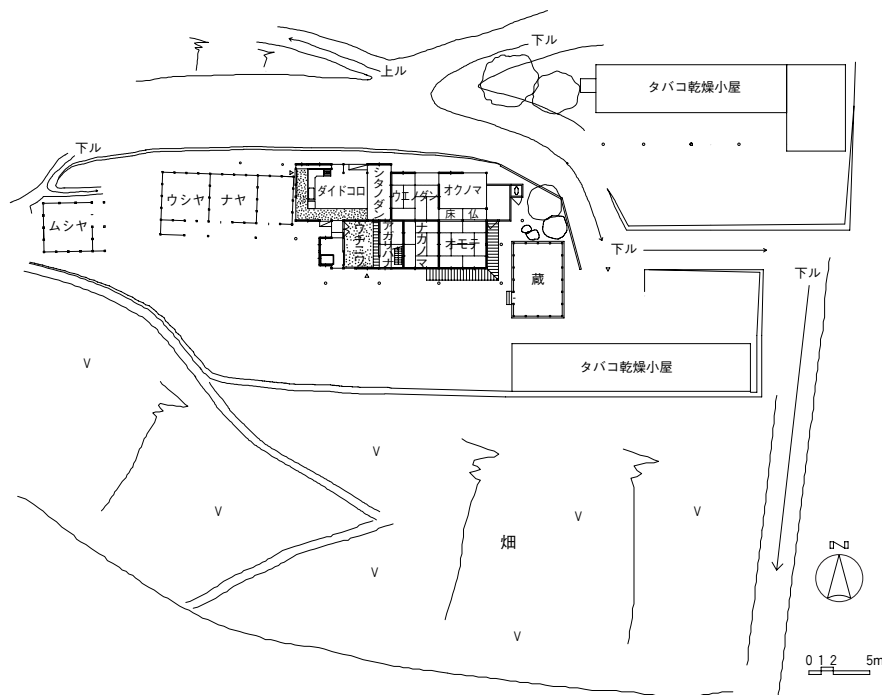


図34 窪田 清家配置図

ウダイコク」と呼ばれる柱が立つ。大黒の下手と裏手に架かるダイドコロ・シタノダンに面した梁を「ウラカタミ」と呼ぶ。内法高は5尺8寸である。

かつて、アガリハナの2階で機織りをしたり、小屋裏に600ナワくらいのタバコを吊って乾燥させたという。アガリハナの床下にはイモツボ（芋穴）がある（図33・34）。

### 9) 新名澄子家 加茂野宮

当家は加茂野宮地区のほぼ中央部の平坦地に位置する。比較的広い敷地は西側で接道し、他は水田で囲まれており、中央やや東よりに主屋が、主屋の東には納屋を、その奥には蔵が設けられている。屋号は「○」に「ニ」を書いた「マルニ」、元は酒造りを家業としていた。

主屋は2階建ての左勝手、間口7.5間、奥行き4.5間、屋根は入母屋造り本瓦葺きである。建築年は安政4年（1857）である。1階平面は変形5間取で、南側には西から「ゲンカン」と「ナカノマ」「オモテ」などの座敷が3室、北側には「カマヤ」「キタ



図35 新名澄子家外観

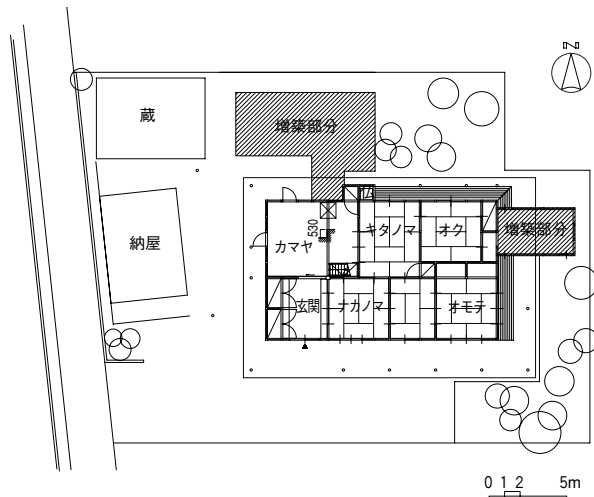


図36 新名澄子家配置図

ノマ」「オク」が並ぶ。主屋の背後には離れと風呂場などが増築されている（図35・36）。

建設当初から2階建てであったかは不明だが、おそらくカマヤ部分は吹き抜けであったと考えられ、少なくともカマヤ上部の座敷は後の改造と考えたほうが良さそうである。

## 5. まとめ

三野町の茅葺き民家を立地条件から見ると、吉野川流域の平野部に位置するいわゆる「平野の民家」と太刀野山地区の山間部に位置する「山の民家」に区分することができる。両者の特徴として際だったものは少ないが、すでに述べたとおり、平野部の民家が比較的小規模なのに対し、山間部の民家は規模が大きいことが挙げられる。山の民家は日当たりの良い南斜面や東斜面に位置しているものが多く、敷地の傾斜方向と主屋の向きが一致している。敷地の地形の制約を余り受けない平野の民家では、主屋は採光条件を考慮して、南向きに設けられている。これらの点は他の地域の山の民家、平野の民家と同じ傾向を示している。

茅葺き民家の間取は明治中期くらいまでは殆どが4間取であった。一方、久保貞夫家や久保義雄家や新名澄子家は江戸時代の建築でありながら屋根は瓦葺きで、間取が6間取であったり、2階建てであったりと、明らかに異なる系譜に位置づけられる。しかし、いずれも当初は玄関を備えておらず、いわゆる支配層の住居とは異なり、富裕農家の住居として、このような形式の民家が建設されていたことは注目に値する。今回の調査では、これらの民家の系譜がその後どのように展開したかを確認することはできなかったが、両久保家に見られる入母屋屋根の四方に下屋を設ける形式は、茅葺き民家以降の農家住宅の一つの型として、現在も建てられている。

一方、茅葺き民家は江戸時代以降も戦後に至るまで、間取に変形5間取や6間取、また2間取、3間取と多少のバリエーションを生みつつも、全体の構成に大きな変化はなく、建設され続けていた。しかし、今回確認できた中で最も新しいのが昭和40年の建築であること、また、昭和30年頃から茅葺き屋根をトタンで覆うようになったことから、茅葺き民家



は昭和40年以降、新築されなくなったと考えることができそうである。

勝手の向きは、地域によって特徴が見られることもあるが、今回調査対象とした茅葺き民家に関しては、特定の傾向を見いだすことはできなかった。詳細調査を実施した久保貞夫家と久保義雄家は、ともに江戸時代の建築とされるが、道路を隔てて隣り合い、また分家である久保貞夫家は本家にあたる久保義雄家の主屋の造りを参考にしたといわれている。しかし、道路の西側に当たる久保義雄家は右勝手、東側にある久保貞夫家は左勝手とその向きが異なる。敷地構成を見てみると、門からのアプローチや付属建物との関係から、より機能的な勝手の位置が選択されたと考えることが妥当と思われる。また、既述したとおり、東向きに建つ民家に右勝手が多いことなどを考えても、三野町においては、勝手の位置が民家の平面形式として定着することはなく、個々の建物の立地や周辺施設との関係から、使い勝手を考慮して勝手の位置が決められたものと推測できる。

聞き取り調査で間取などを確認している際、「ムハチジョウ」という呼び方があることが分かった。これはニワヤカマヤと呼ばれる土間部分と座敷部分の4室のいずれもが8畳の広さを持つ平面形式の民家の呼称である。井川町の調査でも確認された呼び方であるが、三野町内では太刀野山地区だけで確認された。こうしたことから、同じ四間取平面の中でも、特に「ムハチジョウ」という平面形式が、太刀野山地区の住まいのモデルとして捉えられていたものと考えられることができる。

一般に、農家住宅である民家は農業生産と密接な関係を持つが、三野町の民家の場合もその傾向は顕著である。以前の町内の主要農産物は、山間部がタバコ、平野部は養蚕であり、いずれもカイコの飼育、葉煙草の乾燥などに主屋が利用されていた。現在の三野町の茅葺き民家の特徴として、茅葺き屋根を覆うトタンに設けられた通気口の様々な意匠をあげることができるが、この通気口は、茅葺き屋根をトタンで巻くことにより、屋根面に通気性がなくなり、屋根裏でのタバコの乾燥に支障がでるのを避けるために設けられたものと考えられる（図37）。

また、主屋の前面にカイコの飼育のための差し掛



図37 屋根部分の通気口



図38 主屋正面の差し掛け

けを設けている民家も数多く見られた（図38）。差し掛けの奥行きは深いものでは5 mを超えるものもある。当初は主屋の中でカイコを飼っていたが、飼育規模の拡大に伴いスペースが不足し、主屋の前面へと拡張していったものである。そのため、主屋への採光や通風は殆ど確保できない状態になり、生産性を重視した結果、居住性はかなり低下している。民家が単に生活空間と捉えられていたとすれば、その機能が低下するようなことは避けられるはずであり、民家が生活の場だけでなく、生産の場としても重視されていたことの証と考えることができよう。

今後の課題として、建築時期屋や間取りなどが不明な民家が多く、全体の論証が不十分なことが挙げられる。より多くの民家のデータを確認し、ここに述べた仮説を検証していく必要があるものと考えられる。

## 文 献

奈良国立文化財研究所・徳島県教育委員会編（1976）：『阿波の民家』。

彰国社（1976）：『建築大辞典』。

日本民族建築学会編（2001）：『民俗建築大辞典』柏書房。

三野町誌編集委員会編（1974）：『三野町誌』。